

水戸藩第9代藩主・斉昭公の右腕として活躍した藤田東湖は、藩主の蟄居謹慎処分に伴い、自身も閉門蟄居処分となった。2年間に及ぶ幽閉の間、心の支えとなったのが、南宋の忠臣・文天祥の「正気歌」であった。これを範として東湖も「正気歌」を詠んだ。

# 正気歌

(藤田東湖)

---

# 和文天祥正氣歌

藤田東湖

## (1) 原文

### 《漢文》

### 《讀下し》

天地正大氣 粹然鍾神州

天地正大の氣、粹然として神州に鍾る

秀爲不二嶽 巍巍聳千秋

秀でては不二の嶽となり、巍巍として千秋に聳ゆ

注爲大瀛水 洋洋環八洲

注ぎては大瀛の水となり、洋洋として八洲を環る

發爲萬朶櫻 衆芳難與儔

発しては萬朶の櫻となり、衆芳、與に儔ひし難し

凝爲百鍊鐵 銳利可割整

凝りては百鍊の鐵となり、銳利なること整を断つべし

盡臣皆熊羆 武夫盡好仇

盡臣、皆熊羆、武夫、盡く好仇なり

神州孰君臨 萬古仰天皇

神州、孰か君臨す、萬古、天皇を仰ぐ

皇風洽六合 明德侔大陽

皇風は六合に洽く、明德は大陽に侔し

不世無汚隆 正氣時放光

世に汚隆無くんばあらず、正氣、時に光を放つ

乃參大連議 侃侃排瞿曇

乃ち大連の議に參し、侃侃として瞿曇を排す (註1)

乃助明主斷 燄燄焚伽藍

乃ち明主の斷を助け、燄々として伽藍を焚く (註2)

中郎嘗用之 宗社磐石安

中郎、嘗て之を用ふ、宗社、磐石安し (註3)

清麿嘗用之 妖僧肝膽寒

清麿、嘗て之を用ひ、妖僧、肝膽寒し (註4)

忽揮龍口劍 虜使頭足分

忽ち、龍ノ口の劍を揮ひ、虜使、頭足分る (註5)

忽起西海颶	怒濤殲胡氛	忽ち、西海の颶を起し、怒濤妖氣を殲す
志賀月明夜	陽爲鳳輦巡	志賀、月明なる夜、陽りて鳳輦と爲りて巡る (註6)
芳野戰酣日	又代帝子屯	芳野、戰酣なるの日、又、帝子に代りて屯す (註7)
或投鎌倉窟	憂憤正愼愼	或いは鎌倉の窟に投ぜられ、憂憤、正に愼愼 (註8)
或伴櫻井驛	遺訓何殷勤	或いは櫻井の驛に伴ひ、遺訓、何ぞ殷勤なる (註9)
或守伏見城	一身當萬軍	或いは伏見の城を守り、一身萬軍に當る (註10)
或殉天目山	幽囚不忘君	或いは天目山に殉し、幽囚、君を忘れず (註11)
承平二百歲	斯氣常獲伸	承平二百歲、斯の氣、常に伸ぶるを獲たり
然當其鬱屈	生四十七人	然れども、其の鬱屈するに當ては、四十七人を生ず (註12)
乃知人雖亡	英靈未嘗泯	乃ち知る人亡ぶと雖も、英靈、未だ嘗て泯びず
長在天地間	凜然紘彝倫	長に天地の間に在り、凜然として彝倫を紘す
孰能扶持之	卓立東海濱	孰か能く之を扶持するものぞ、卓立する東海の濱に
忠誠尊皇室	孝敬事天神	忠誠、皇室を尊び、孝敬、天神に事ふ
修文兼奮武	誓欲清胡塵	文を修め兼ねて武を奮ひ、誓つて胡塵を清めんと欲す
一朝天步艱	邦君身先淪	一朝、天步艱み、邦君、身、先づ淪す
頑鈍不知機	罪戾及孤臣	頑鈍、機を知らず、罪戾、孤臣に及ぶ
孤臣困葛藟	君冤向誰陳	臣、葛藟に困しむ。君冤誰に向かひてか陳べん
孤子遠墳墓	何以報先親	孤子、墳墓に遠かる。何を以て先親に報ぜん
荏苒二周星	獨有斯氣隨	荏苒たり二周星。獨り、斯の氣の隨ふ有り

嗟予雖萬死 豈忍與汝離	嗟、予萬死すと雖も、豈汝と離るるに忍びんや
屈伸付天地 生死又何疑	屈伸、天地に付す、生死、又、いつくんぞ疑はん
生當雪君冤 復見張四維	生きては當に君冤を雪ぎ、復た綱維を張るを見るべし
死爲忠義鬼 極天護皇基	死しては忠義の鬼となり、極天皇基を護らん

## (2)現代語訳

天地に満ちる正大の気は、粹を凝らして神州日本に集まり満ちている。

正気は、地に秀でては富士の峰となり、高く大いに幾千年もそびえ立ち、流れては大海原の水となり、あふれて日本の大八洲をめぐる。

開けば、幾万もの枝に咲く桜の花となり、ほかの草木の及ぶところではない。

正気は、凝れば、百度鍛えし日本刀となり、切れ味鋭く兜を断つ。

忠臣いづれもみな勇士。武士はことごとく良き仲間、良き競争相手。

神州日本に君臨されるはどなたか、太古のときより天皇を仰ぐ。

天子の御稜威（ミイツ）は、東西南北天地すべてにあまねく広がり、その明らかなる御徳は太陽に等しい。

世の中に栄枯盛衰の絶えることはない。時に正気が光り輝く。

たとえば、欽明帝の御代のこと。仏教受容の可否が論ぜられた時、大連である物部尾輿（モノノベノオコシ）の仏教排撃論に正気は現れ、堂々と譲ることなく剛直なる正論をもって、蘇我稲目の惑える仏教を排斥した。

或いはまた、敏達朝では、英明なる帝の叡慮を助けた。疫病が流行したのは仏教礼拝の崇りであるとする物部守屋（モノノベノモリヤ）らの上奏に正気は現れ、天皇が仏像焼却の断を下すのを助けた。蘇我氏の仏像は海に捨てられ、私寺はことごとく焰をあげて焼きつくされた。

またかつて、中臣鎌足が正気をおこなった。「乙巳（イッシ）の変」（大化の改新）に参じて、蘇我氏の専横を廃して皇室国家を磐石安泰ならしめた。

また、和氣清麻呂（ワケノキヨマロ）もこの正気をもって、宇佐八幡の御神託をいただいて、妖僧・弓削道鏡の肝を寒からしめた。

同じく、北条時宗。建治元年（1275年）、降服迫る「元」の使節を虜にし、相模の国は竜の口にて切り捨てて、捕虜の首と胴を泣き別れにした。同じく、元寇襲來のとき、正気は玄界灘の猛風を起し、怒涛とともに外国軍の異様な気配を滅ぼしつくした。

北条高時の軍が都に後醍醐天皇を攻めた時には、藤原帥賢（モロカタ）は志賀の浦に輝

く月を眺めつつ、天子の御輦が比叡山に巡幸したと見せかけて叡山の僧徒を感奮させた。

また、吉野山での激戦の日には、正気の現れは村上義光が後醍醐天皇の皇子・護良親王の身代わりとなって危難を救うことにもなった。

正気は、時には鎌倉の土窟に投ぜられて最期を迎える護良親王の思いの中に凝集し、親王は国の前途を憂憤して悲痛をきわめた。

楠木正成は兵庫の桜井の駅まで子の正行（まさつら）を伴ってきたが、ここでの合戦に死を覚悟して、子の正行には故郷の河内に帰ることを命じ、教え諭す言葉はいともねんごろであった。

あるいは、戦国時代の末には甲斐の武田勝頼が戦い敗れて天目山に追い詰められてゆく時、勝頼に疎まれ幽閉されていた小宮山内膳が、主君を忘れることなく駆けつけて勝頼に殉じようとし、ついに戦死したこともあった。

また、石田三成が徳川家康を討たんと挙兵した時、徳川の老臣・鳥居元忠は僅か一千八百名で伏見城を守っていたが、押し寄せる三万の大坂勢を迎えて、みごとに十日間を支えきって討ち死にした。一人の身で万余の敵に当たる働きであった。すべて正気の発露である。

徳川幕府が開かれてより、大平の続くこと二百年。正気は、この間つねに人の世に伸び広がっていった。そうはいっても、時にこの正気も世に現れぬかと思えたこともあったが、その時に赤穂義士四十七人を生じたのである。

すなわち、人の肉体は死によって亡びるが、人が宿していた英霊は決して滅びることはないのである。永遠に天地の間であって、力強く人の世の道義を確立しているのだと知られる。それならば今日、誰が主となってこの正気を支え保ってゆくのか。それは東海のほとりの人傑、水戸斉昭公である。その忠誠のまごころは厚く皇室を尊び、孝敬の誠を尽くして天の神につかえている。学問を盛んにするとともに国土防衛の志気を奮い起こし、日本を窺う夷狄の野心を一掃してやろうと誓っている。

しかるに、にわかに困難な時運に遭遇して、藩公自身がまず真先に蟄居謹慎を命ぜられてしまったのである。愚かなる私は、その幾(キザシ)を未然に察することもできず、藩公ばかりか我が身までもが罪をえるにいたった。斉昭公から引き離された私は、不自由をかこつ閉門のなか、斉昭公の冤罪を誰に向かって訴えたらよいのか。今は父も亡きこの私は、故郷の墓場から遠く離れた江戸での蟄居、亡き父上に詫びようとしても、そのすべさえない。

いつしか二年の時が過ぎ、幽閉の身に、ただこの正気のみが満ちている。藩公を輔佐し得なかった私の罪は万死にあたいするが、たとえ死んだとしても、正気よ、汝と離るるにはしのびない。

我が身のなりゆきは天地に任せたもの、生きようが死のうが、もはや何の迷いもない。生きてあるならば藩公の冤罪をそそぎ、藩公がふたたび表舞台で国の秩序を伸張する姿を見ることができるようにならなければならない。もし死を迎えるならば、忠義の鬼と化し、天地

のある限り、天皇の御統治をお護り申し上げます。

### (3) 序文

この「正氣の歌」には、はじめに漢文の序があります。

彪年八九歳、受文天祥正氣歌於先君子、先君子每誦之、引盃擊節、慷慨奮發、談說正氣之所以塞天地、必推本之於忠孝大節、然後止。

距今三十餘年。凡古人詩文、少時所誦、十忘七八。至於天祥歌、則歷歷暗記、不遺一字。而先君子言容、宛然猶在心目。

彪性善病。去歲從公駕而來也、方患感冒、力疾上途。及公獲罪、彪亦就禁錮。風窓雨室、濕邪交侵、菲衣疏食、飢寒並至、其辛楚艱苦、常人所難堪、而宿痾頓癒、体氣頗佳。睥睨宇宙、叨与古人相期者、蓋資於天祥歌為多

夫天祥值宋社之傾覆、身囚於胡虜、實臣子之至變、若彪被幽、則特一時奇禍、其事与跡、皆大夫同、然古人有云、死生亦大矣、今彪之困阨、既已若此、而人猶或不以慊於意、曰、何不遂賜死、曰、何不早自裁、彪之所以出入於死生間、亦復如此、而頑乎不變、自信愈厚者、未始不与天祥同也、嗚呼、彪之生死、固不足道、至於公之進退、即正氣之屈伸、神州之汚隆繫焉、豈特一時奇禍之云乎哉。

天祥曰、浩然者、天地之正氣也、余広其説曰、正氣者、道義之所積、忠孝之所發、然彼所謂正氣者、秦漢唐宋、變易不一、我所謂正氣者、亘万世而不變者也、極天地而不易者也、因誦天祥歌、又和之以自歌。

私は八、九歳の時、文天祥の「正氣の歌」を亡き父上から教えられた。父上がこの詩を吟ずる折には、いつも酒杯を手にして、一方で拍子を取り、悲憤慷慨していたものだ。そして、正氣が天地の間に充満するわけを説き、その正氣の源は忠孝の大節に由来することに及んで、話が終るのであった。

今から三十数年も昔のことになる。だいたい、子供の頃に読んでいた古人の詩文は、十のうち七八を忘れてしまっているが、文天祥の「正氣の歌」だけははっきりと覚えていて、一字も忘れていない。しかも当時の父上の言葉や容貌までが、そのままに今も胸に留まり目に浮ぶ。

自分は生来病気がちで、去年、水戸公(斉昭)のお供をして江戸へ上る時にも、ちょうど感冒にかかっていたが、病む身をつとめて旅立ったのである。やがて水戸公が幕府のお咎めを受けることになってしまい、私もまた閉門蟄居の身となった。

風が吹き込み雨が降り込む居室は、じめじめとして澱んだ空気が入り込んで、粗衣粗食で過ごす身には飢えと寒さが迫り来る。その艱難辛苦は、常人の堪え難いところである。

ところが、年来の病はにわか癒えて、体調はすこぶるよい。古今東西を昂然と睨み据えて、吾が輩は古の人傑にも匹敵するのではないかと愚かにうぬぼれたりもするのは、思えば文天祥の歌を吟誦していたお蔭であるのかもしれない。

そもそも文天祥は南宋の滅亡に際会し、その身は胡虜に囚われてしまった。一国の臣下としては、この上なき変事であった。自分が幽閉されたことなどは、単に一時の災難であるに過ぎない。その状況もその行動も、いずれも大違いである。

しかしながら、古人の語にも「生死は人の大事である」と言い、今のところ、彪の苦難は上に述べた通りであるが、人々の中にはまだ飽き足らぬとして、「何ゆえ早く切腹を申し付けられぬのか」、「何ゆえ早く自決せぬのか」と、言う者もある。

私も生死の間を行き来しているというのは、こうした状況にあるからである。しかも、その中であって志をかたくなに変えることなく、信念をますます強めているのは、まったく文天祥と異なるところはない。

ああ、わが生死などは、もとより言うに足りぬ。だが水戸公の進退ということになると、これは、正気が伸びるか塞がるか、日本が栄えるか衰えるかに関わっている。どうして単に一時の災難に過ぎぬなどと言っておられよう。

文天祥は「雄々しく満ちわたる浩然の気、それが天地の正気である」と言っている。私がそれを敷衍していえば、正気とは道義の積み重なったものであって、忠孝もそこから生じてくるものである。

ただし、文天祥のいう中国での正気は、秦・漢・唐・宋と、王朝が変わるたびに現れかたが変化する。私のいう日本での正気は、万世にわたって不変であって、天地の終末にいたるまでも変らぬものである。

このように考えつつ、文天祥の「正気の歌」を朗誦し、さらにこれに和して自らも歌を作った。

#### (4) 注釈

以下には、「文天祥・藤田東湖・吉田松陰正気歌詳解」(槇不二夫著、以下「詳解」と略します。)の解説を引用しつつ、多少それを分かり易く説明していきたいと思えます。「正気の歌」について書かれた書籍はあまり多くありませんので、相当古いものですが全般にわたる記述がある本書に依存しました。

同書は茨城県立図書館にもありますが、ここでは国立国会図書館デジタルコレクションに収録のものを利用しました。

## 註1：「乃參大連議 侃侃排瞿曇」

『人皇二十九第欽明天皇の時、百済国より仏像・経論を献じ、盛んに仏の功德を称す。帝即ち群臣を集めて礼すべきや否やを議し給う。大臣蘇我稻目は受けて礼せむと請い、大連物部尾輿、中臣鎌子等堅く執て聞かず、我国恒に天地宗廟の百神を崇拜すること定まれる道たり。然るに今何ぞ夷狄の教法を信じ、蛮神を拝して人心を惑わすべけんやと、侃々論諍し、具に諫奏するところあり。帝依りて仏像を稻目に賜う。稻目喜びて我が向原の第を寺として仏像を安置せり。これを我が国佛寺の起源とす。』(詳解)

「詳解」を多少分かりやすくします⇒第29代欽明天皇の時、百済国より仏像・経典を献上してきて、仏の功德の大きいことを盛んに申し伝えてきた。欽明天皇は群臣を集めて仏教を受け入れるべきかどうかを論議させた。大臣・蘇我稻目は受け入れて尊崇すべきだとお願ひした。しかし、大連・物部尾輿(オオムラジ・モノノベノオコシ)、中臣鎌子(ナカトミノカマコ)等は蘇我氏の論には耳を貸さず、我が国は天地宗廟以来、八百万の神を崇拜することが定道であり、それなのに、今どうして外国の宗法を信じ、野蛮人が拝む神を取り入れて人心を惑わすべきだろうか、侃々諤々に論諍し、共に諫奏したのであった。これも正気の現れであった。

そこで帝は、それらの論争を聞いた上で、仏像を稻目に御下賜になった。稻目は喜んで自分の向原の邸を寺としてそこに仏像を安置した。これが我が国における仏寺の起源となった。

## 註2：「乃助明主斷 燄燄焚伽藍」

『その後我が国疫病大いに流行し、庶民の死するもの頗る多かりしかば、物部尾輿、中臣鎌子等奏して是全く仏を礼するに由るならんと、遂に寺を焼き仏像を難波の掘江に沈めたり。然るに敏達帝の6年、また百済新羅等より盛んに仏道を輸入し仏法大いに起こる。

此年また疫病大に行はれしかば、尾輿の子物部守屋鎌子の子中臣勝海等奏して、稻目の子蘇我馬子の厚く妖教を信ずるを以て神祇の祟りかかる災害のあるならん、速やかに禁絶し給ふべしと。依りて寺院仏像を焼毀し病災また従てやみき』(「詳解」)

「詳解」を多少分かりやすくします。⇒その後、我が国で疫病が大流行し、ために多くの庶民が感染し亡くなった。そこで、物部尾輿、中臣鎌子等はこれ全て仏教を信仰するからではないかと上奏し、遂には寺を焼き、仏像を難波の掘江に沈めてしまった。

その後も百済・新羅等から仏教は伝えられ、再び仏教が盛んになった。ところが、敏達天皇の6年に、まともや疫病が大流行したので、(尾輿の子)物部守屋・(鎌子の子)中臣勝海等が次のように上奏した。すなわち、このような疫病の大流行という災害がもたらされたのは、(稻目の子)蘇我馬子が篤く妖教たる仏教を信仰するから神祇の祟りがあったのであり、速やかに仏教を禁教として頂きたい、と。そして、寺院・仏像を焼毀することに決まり、焼却の後にはさしもの疫病の大流行も治まったということである。



### 註3：「中郎嘗用之 宗社磐石安」

『人皇三十五第皇極帝の時、馬子の子蘇我入鹿朝権を握り、其の権勢父にも過ぎて頗る僭越を極め、遂に神器を覬覦(きゅう)せんとす。朝廷の危うきこと実に累卵の如くなりしかば、鎌足憤慨に堪えず。匡濟の志堅く、苦心慘憺縦横計營し、器度非凡に在はせる舒明帝の御子中大兄皇子こそと密に望をし奉り、法興寺にて蹴鞠の御遊びあるに折を得、親近して大事を謀るの緒を開けり。偶々三韓の貢使来朝を機とし、先ず石川麿に表文を読ませ、佐伯子麿に入鹿を斬らせんと謀る。入鹿の参内を見るや四門を固め、皇子は矛を杖きて正殿の側に隠れ給えば、鎌足も弓箭を執りて御後に従うえり、入鹿玉座の傍らに侍し、石川麿表文を読むに、声ふるいて汗流れる。入鹿怪しみてその故を責む。

既に読み終わらんとすれども子麿ためらひて発せざれば、皇子堪え兼ねて入りて入鹿を斬り給う。子麿続いて之を斬る。皇子即ち跪きて入鹿父子が罪科を挙げて、臣等宗廟のため此逆臣を誅せし由を上奏す。宗廟社稷是に至りて盤石の如く安からしめしもの、実に鎌足の偉勲なり、中大兄皇子は後立て天智帝の位に即くさせ給う。』(「詳解」)

「詳解」を多少分かりやすくします。⇒聖徳太子に死により大豪族である蘇我氏を抑えるものがなくなり、次第に蘇我氏の専横は甚だしいものとなった。第35代皇極天皇の時、(馬子の子)蘇我入鹿が政治の実権を握り、その権勢は父の馬子時代を凌ぐほどになり、その態度物腰は頗る僭越を極めた。その上、身分不相応にも、遂には皇位をも窺うかとも見え、朝廷は、まさに卵を積み上げたような極めて不安定な危うい事態となった。

この事態に、正義感の強い鎌足は憤慨に堪えられず、苦心慘憺、入鹿討滅の計画をあれこれと練り上げていた。先帝・舒明天皇の御子である中大兄皇子は非凡にして大器の誉れ高い方だったので、密かにこの方こそと望みを託すことにし、接近の機会を狙っていた。法興寺における蹴鞠の御遊びがある折に、中大兄皇子の皮鞋が脱げたのを鎌足が拾って中大兄皇子に捧げたことが機縁となって2人は親しむようになり、入鹿討滅の大事業を実現する端緒となった。

折しも、三韓(新羅・百済・高句麗)からの貢使が来朝していた。儀式は朝廷で行われ、大臣である入鹿が必ず出席するはずである。中大兄皇子と鎌足はこれを好機として暗殺を実行することとし、仲間に引き入れておいた蘇我氏の一族である蘇我倉山田石川麿に先ず表文を読ませ、佐伯子麿に入鹿を斬らせるよう手筈を整えた。

入鹿の参内を見るや四門を固め、皇子は矛を杖いて正殿の側に隠れ、鎌足も弓箭を執ってその後に従っていた。入鹿は玉座の傍らに侍し、石川麿が表文を読む声ふるいて汗を流しているのを見て、不審に思った入鹿はその理由を糾した。

既に石川麻呂が表文を読み終わろうとするのに、佐伯子麿は二の足を踏んで実行に踏み切らないので、溜まり兼ねた中兄大皇子が躍り出て入鹿を斬り殺した。子麿も続いてこれ斬った。

中兄大皇子は跪き、入鹿父子の罪科を挙げて、宗廟のためこの逆臣を誅滅した由を上奏した。このことにより天皇家の宗廟社稷は盤石の如く安定したのであり、それもこれも実に鎌足の偉大な功績によるものである。中大兄皇子は後に天智天皇とられた。

#### 註4：「清丸嘗用之 妖僧肝膽寒」

『人皇四十六代孝謙帝深く弓削道鏡を嬖（へい）し玉ひ、権勢比なく専横至らざるなし。時に太宰の主神習宣阿蘇麿なるもの道鏡に詔（へつら）ひ、八幡の神教と矯（いつ）はり、道鏡をして帝位に即かしめば天下太平ならんと奏す。依りて帝位を道鏡に譲らんとし玉ひ、先つ和氣清麿をして神勅を受けしむ。発するに臨み道鏡清麿を脅して曰く、我若し帝位に上らば重く汝を用ひ厚く汝を賞すべし、若し然らずんば必汝を殺すべしと。

清麿宇佐に詣り帰り奏するに神教を以てす。曰く我国開闢以来君臣の分定めり、臣を以て君となし、こと未だ之れ有らず、天ツ日嗣は必皇緒を立つべし、道鏡何者ぞ悖逆（はいぎやく）にして切りに神器を窺竄（きゆう）す、宜く迅に煎叙すべしと。

道鏡大いに怒り、汝神託を偽る無道ものぞと、姓名を別部穢麿（きたなまろ）と改て大隅国に流す、清麿素より期する所あり、泰然として配所に赴く、道鏡は猶以て足れりとせず、遂に人を以て之を殺さんとせしが、雷雨の為に果さず、時に勅使来り辛ふじて免る、ことを得たり。

参議藤原百川其忠烈を愍（あわれ）み封戸を割きて之に給せり、後道鏡は下野に流され清麿は召し還さる、是に於て紀綱振肅し寶祚彌泰山の如くなりしもの、實に清麿の力に頼るものと謂可し、清麿人と為り忠直にして気節あり学校を立て義田を開く、薨ずるに及びて正三位を贈らる、孝明天皇の朝更に正一位を贈られ、今上天皇に至りて別格官幣社に列せられぬ』（「詳解」）

**「詳解」を多少分かりやすくします⇒**奈良東大寺に盧舎那仏を建立した聖武天皇と光明皇后との間にはついに皇子が育たず、阿部内親王が皇太子となった。天平正宝元年（749）、父・聖武天皇の譲位により阿部内親王が即位し、史上6人目の女性天皇である第46代孝謙天皇となる。

天平勝宝8年（756）に父の聖武上皇が崩御した。その遺勅で指名されていた道祖（ふなど）王を、翌年皇太子にふさわしくない行動があるとして廃し、舎人親王の子・大炊王を新たな皇太子とした。翌々年（758）には、孝謙天皇は藤原仲麻呂が推挙していた大炊王（淳仁天皇）に譲位し、太上天皇（上皇）となる。

天平宝字5年（761）、平城宮改修のために都を一時的に近江国保良宮に移した際、孝謙上皇は病に倒れた。その際に、「禪師」として朝廷に入ることを許されていた道鏡が非常に熱心に看病をした。禪師とは、修行を行った僧侶の名称であるが、朝廷で「治療」を行う僧侶にも与えられた名称（看病禪師）であり、実際に道鏡は孝謙上皇に「治療」を行うことで関係を深めていったのである。

病気が治った孝謙上皇は、それ以降道鏡と様々な意味で関係性を深め、道鏡は実質的な「寵愛」・「政治的重用」を受けるようになった。氏素性のはっきりしない僧侶を特別扱いすることに対して、淳仁天皇は事あるごとに意見を述べたため、孝謙上皇と淳仁天皇との関係が悪化した。

孝謙上皇の母・光明皇太后は藤原不比等の子であり、武智麻呂、宇合、房前、麻呂（藤原4兄弟）はその兄だった。次兄・武智麻呂の子である藤原仲麻呂は上皇にとって従兄にあたる。仲麻呂は叔母にあたる光明皇太后の信任が厚く、従妹である孝謙上皇とも良好な関係にあった。上皇が道鏡を偏重するのは仲麻呂にとって座視することができず、淳仁天皇を介して諫めていた。

孝謙上皇・道鏡と淳仁天皇・仲麻呂との対立は深まった。天平宝字8年（764）、危機感を抱いた仲麻呂はクーデターを企てていた。密告があり、仲麻呂の専制に不満を持つ貴族たちを結集した上皇方が先手を打った。仲麻呂は官軍に攻められて敗北し、捕らえられて斬首された。この乱の責任で淳仁天皇は退位させられ、孝謙上皇が重祚して第48代称徳天皇となった。道鏡はその片腕となり、政治にしばしば介入した。僧籍のまま太政大臣となり、さらに「法王」となった。

神護景雲3年（769）7月頃に、「道鏡を皇位に就かせれば天下太平になる」との宇佐八幡神の神託が奏上されてきた。道鏡はこれを聞いて喜ぶとともに自信を持ち、自らが皇位に就くことを望む。（道鏡の弟・弓削浄人が九州防衛のトップである太宰帥だったので、道鏡兄弟が謀って、大宰府主神兼宇佐八幡宮神官・中臣習宜阿曾麻呂を仲間に入れて仕組んで託宣させたのであろう？）

称徳天皇は神託を確認するため、清麻呂に宇佐八幡宮へ赴き神託を確認するように勅した。清麻呂は出発にあたって、道鏡から吉報をもたらせば官位を上げる旨をもちかけられたという。

清麻呂は天皇の勅使として宇佐神宮に参宮し、「わが国は開闢（かいびやく）このかた、君臣の分が定まっております、臣下のものが天位についた例はない。天皇には、必ず皇統にあるものを立てるべきである。天位を狙う無道の者は速やかに追い払うべし。」という神託を朝廷に持ち帰り、称徳天皇に奏上した。

道鏡は報告を聞いて怒り、清麻呂を因幡国に左遷したのち、さらに「別部穢麻呂（わけべのきたなまる）」と改名させて大隅国へ配流した。道鏡の命により暗殺者が配流途中の清麻呂を追っていたが、殺害に及ばんとするとき急に雷雨が発生して辺りが暗くなり、また急ぎ派遣された勅使が追い付いたため、企みは失敗したという。

神護景雲4年（770）8月に称徳天皇が崩御したため、後ろ楯を無くした道鏡は失脚する。皇太子・白壁王（→光仁天皇）により下野国薬師寺別当に左遷された。

同年9月に清麻呂は大隅国から呼び戻されて入京を許され、やがて官界に復帰した。清麻呂は庶務に熟達して過去事例に通暁していたことから、桓武朝において実務官僚として重

用されて高官に昇った。

参考：坂口安吾「道鏡」（「坂口安吾全集4」筑摩書房）には、もっと人間的な称徳天皇と道鏡との関係が描かれています。

#### 註5：「忽揮龍口劍 虜使頭足分」「忽起西海颶 怒濤殲胡氛」

『世祖忽必烈（フビライ）に至りて、南宋を滅ぼし支那の地を一統して国号を元（ゲン）と改め、猛威を四隣奮いしかば、四方貢を致すもの多かりき。遂に之を我国に及ぼさんとし、国使筑前に来たりて書を太宰府に上れり。府直に之を鎌倉に護送す。時に執権北条時宗その書の侮慢なりしを以て、其の使者を鎌倉辰之口にて斬殺し、遍く諸国に令して外寇の来るべきを警戒せり。

元主は其の使者の我に殺されたるを以て大いに怒り、弘安四年十万の大軍を起こして襲い来たり。壱岐対馬を掠奪し進みて博多に迫る。鎮西の将士皆奮戦し合戦凡そ両月に亘れども、勝敗未だ決せず。上皇親から男山八幡宮に参籠し、身を以て国難に代わらんことを祈らせ給ひぬ。之を聞くもの老幼婦女に至るまで唯国あるを知りて我あるを忘る。賊軍猖獗を極め援軍海を蔽ひて来る。閏七月朔日敵は彌進みて長防の間に入り、今や本州を突かんとす。時に大風俄に起こり、逆浪天に漲りて、数万の賊艦或いは岩礁に砕かれ或いは海底に覆没し、溺死海を埋め十万の胡兵生還するもの僅かに三人、壯絶快絶を極めたり。後世之を弘安の神風と云う。靈妙なる正気の光輝、護国の精誠、天地に威通したるの結果なりというべし。』（「詳解」）

「詳解」を多少分かりやすくします⇒モンゴル軍は、中国の北部を制していた女真族の金国を滅ぼしたのち、第5代皇帝の世祖・忽必烈（フビライ）の時代になって、中国の南部に命脈を保っていた南宋を滅ぼした。これにより中国の地の南北統一を成し遂げ、国号を「元」と改めた。

朝鮮半島の高麗王国を属国化した後、遂に我国にもその触手を伸ばし、数回にわたり国使を派遣してきたが、日本側はその書が無礼だとして返書を発しなかった。服属させる目的を達成できなかったため、忽必烈は武力での日本侵攻を決断した。高麗国に艦船300艘の建造を命じ、1274年に元軍と高麗軍による日本侵攻を開始した。この戦闘が第1回目の元寇・「文永の役」と呼ばれるものである。

両軍は対馬、壱岐を制圧した後九州に上陸したが、日本の武士団も善戦した。モンゴル軍にとって戦況は必ずしも有利ではなかったため、一旦艦船に引き揚げた。その夜、季節外れの大暴風雨に襲われ、元・高麗両軍はほぼ壊滅してしまった。

1275年2月、忽必烈は日本を服属させるため、また使節団を送ってきた。使節団は鎌倉に護送され、時の執権北条時宗は鎌倉辰之口にておいて5名の使節を斬殺したうえ、諸国に通達して元寇を警戒し、防備体制を整えるべく命令を発した。

忽必烈はその使者が殺されたため、いよいよ日本征服の意を固め、弘安4年（1281）

10万の大軍を起こして襲来した。世界史上最大規模の船団であったとされている。元・高麗両軍は壱岐、対馬を掠奪して、博多に上陸した。合戦は6～7月と2ヶ月にわたり、鎮西の将士が皆奮戦したため勝敗はなかなか決しなかった。7月30日の夜、台風が襲来し、賊軍の数万の艦船はあらかた海底に覆没し、10万の賊兵のうち生還したものは僅かに3人だったと伝えられる。後世これを「弘安の神風」と言うようになった。靈妙なる正気が輝き、国を護ろうという誠が、天に通じた結果に違いない。

#### 註6：「志賀月明夜 陽爲鳳輦巡」

『人皇九十六代後醍醐帝の御宇、幕府の執権北条高時横暴不臣を極め、屢兵力を以て天關(てんけつ)を犯し廢立を謀りしが、朝廷之を覚り窃に主上を落し奉らんとして、大納言藤原師賢衰龍(こんりゅう)の御衣を被りて、鳳輦に駕し偽て叡山に赴く、其隙に乘じ主上は微服して、近臣等と潜に笠置山に幸し玉へり、時に元弘元年八月、折しも湖上の月面白ければ、師賢一首を口占す、

思ふこと なくてぞ見まし ほのぼのと

有明の月の志賀の浦波』(「詳解」)

「詳解」を長くなりますが、多少分かりやすく解説します⇒第96代後醍醐天皇は豪邁な人柄で、意欲的に清新な政治を始めようとした。天皇の側近に日野資朝と日野俊基という下流ながら少壮血気の青年貴族がおり、この二人のほか中納言四条隆資、大納言藤原師賢、参議平成輔の5人が北条氏討滅を計画していた。仲間に引き入れた武士からこの倒幕の計が漏れ、資朝と俊基は逮捕され、鎌倉に護送された。(事件は正中元年に起こったため、「正中の変」という)

正中の変の黒幕は後醍醐天皇というのはいわば公然の秘密だったので、後鳥羽上皇による「承久の変」後の処分にならぬ、天皇の廢位や遠流も予測された。しかし、鎌倉幕府の執権・北条高時は、日野資朝を佐渡へ配流するだけにとどめ、穩便に一件落着とされた。

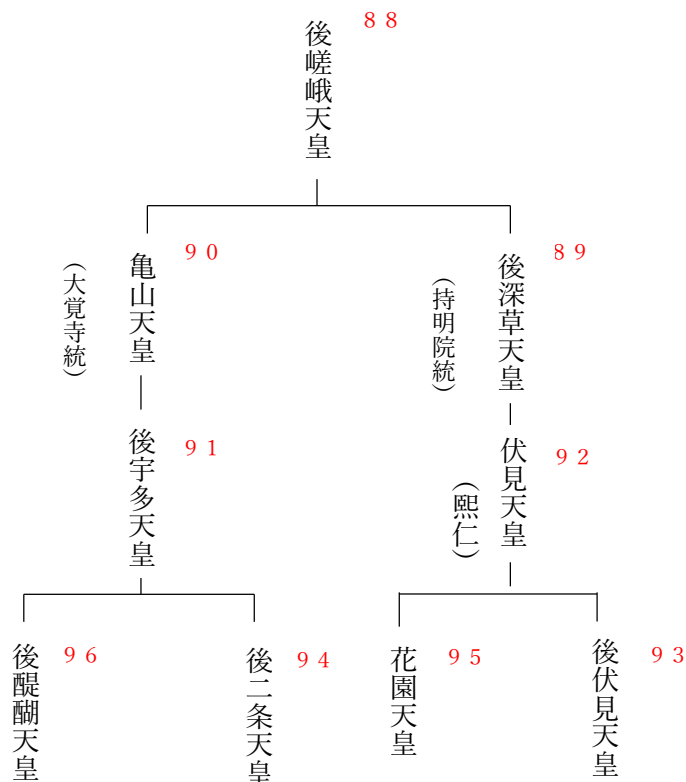
時代は少し遡るが、第88代後嵯峨天皇の後を後深草天皇(第89代)が、その後を弟の龜山天皇(第90代)が、さらにその次を龜山天皇の子が継ぎ後宇多天皇(第91代)となった。弟の系統が2代続いたことは、後深草上皇としては面白くない。後深草・龜山双方の間に劍呑な雰囲気生まれた。

双方がその言い分を幕府に競って訴えるに及んで、幕府としても調停の労を執り、時の鎌倉幕府執権・北条高時が妥協策(後深草上皇の皇子・熙仁親王を龜山上皇の養子にし、皇太子の位につける)を示し、両上皇も了解した。天皇が双方の系統から替るがわる立つという「両統迭立」の端緒となり、龜山院方を大覚寺統、後深草院方を持明院統という。

後宇多天皇が讓位した後は皇太子が踐祚して伏見天皇(第92代)となり、後伏見(第93代、伏見天皇の皇子)、後二条(第94代、後宇多院の皇子・邦治)、花園(第95代、後



伏見天皇の弟)、後醍醐(第96代、後二条天皇の弟)と替わった。大覚寺統の後宇多天皇の後は、持明院統→持明院統→大覚寺統→持明院統→大覚寺統となり、この間、両統による幕府への裏工作は激烈であったと伝えられている。(「天皇の歴史4」講談社学術文庫を参考にしました)



後醍醐天皇の次とされていた病弱な邦良親王(後二条天皇の皇子)が死去すると(1326年)、後醍醐天皇は自身の直系の子孫に皇位が継承されることを望んだが、持明院統側の運動が功を奏して後伏見上皇の量仁皇子の立太子が実現した。

後醍醐天皇は、皇統問題への鎌倉幕府の干渉と受け止め、不満はその頂点に達し、北条氏への反感をいよいよ強くし、倒幕を企てるようになった。が、先の「正中の変」のこともあるので、慎重に秘密裏に手を打っていた。

元弘元年(1331)4月、天皇の重臣の一人から鎌倉幕府に、天皇に挙兵倒幕の意図ありとの密告があった。幕府は直ちに動き、陰謀に参加していた首謀者を逮捕し、処刑した。しかし、天皇を逮捕する動きはなく、天皇も目立った動きをみせなかった。

ところが、3ヶ月余り経った8月に、天皇は突如夜陰に紛れて皇居を脱出し、笠置山を目指した。これに供奉した花山院(藤原)師賢は、命により、三条河原で服装と腰輿を整え、天皇の身替りとなって比叡山に登った。

## 註7：「芳野戦酣日 又代帝子屯」

『師賢偽りて鳳輦に擬して叡山に赴きしを以て、北條の兵皆叡山を攻む、護良親王衆徒を率いて善く防ぐ、程なくして眞の行幸ならざるを知られて衆徒離散せしかば、親王師賢皆逃れて笠置に至る、然るに城の守り利なくして正成一時は城を棄て後再之を復し、親王は義兵を募りて芳野に起る、北条氏大軍を挙て之を攻囲みしかば、兵少ふして終に守り難く城將に陥らんとす、此時村上義光親王の戦袍を被り、城樓に登て大声護良今戦死せんと呼ばりければ、敵勢此に集り外の囲み自ら解くるを得たり、親王其隙に乗じて落延び給ひ、幸ふして危難を免れ遂に大業を中興す、護良親王は大塔宮と称し、後醍醐帝の御子資性英邁にして胆略あり』（「詳解」）

「詳解」を長くなりますが、多少分かりやすく解説します⇒前註でも触れたように、皇居を脱出した後醍醐天皇になり代わって藤原師賢が比叡山に登り、これに欺かれた六波羅の幕府軍は一行を追って比叡山に押し寄せたが、これまた同じ誤解をした延暦寺衆徒の士気も上がり、後醍醐天皇の皇子で、天台座主をつとめた護良親王（「大塔の宮」）が叡山の山門僧徒を率いて幕府軍をよく撃退した。この間に天皇は追撃を受けずに笠置山に潜幸することができた。しかし、主上というのは実は替玉であることはじきに露見し、これに失望した延暦寺衆徒は離反し、雲散霧消してしまった。やむなく護良親王、師賢らは窃かに叡山を下り、笠置山に拠る天皇に合流した。

後醍醐天皇は笠置山に籠ったものの、大した軍兵も伴っていなかった。比叡山攻防で幕府軍が敗れたことが広まると、かねてから幕府に反感を抱いていた近国の武士たちが続々と馳せ集まってきた。しかし、幕府軍は鎌倉からぞくぞくと西上して、笠置山攻撃に加わったので、陰阻をほこった笠置山城も遂に陥落し、後醍醐天皇は幕府側に捕らえられた。

この間、赤坂城に立て籠もった楠木正成は、500人の寡兵ながら知謀・策略を駆使して幕府軍を翻弄し、善戦していた。しかし、長期戦は不可能と考えた楠木正成は、奇策を用いて脱出し、付近に潜伏した。このため、関東の大軍も10月末から次々と関東へ帰還していった。笠置山の陥落、後醍醐天皇の逮捕・幽閉により兵乱はひとまず終熄したかにみえたが、消えた護良親王と楠木正成という懸念材料が残った。

笠置山陥落・赤坂落城の後1年ほどは、表面上は平穏だった。その間、その護良親王は帝の代わりになり全国に令旨を発して反幕勢力を募りつつ、十津川、芳野、熊野あたりを潜行し、土豪たちを組織して廻っていた。また、楠木正成は金剛山のあたりの各所に秘かに城郭を築いて廻り、12月には先に失った赤坂城を急襲し、猛攻を加えていっきょに奪回した。

翌元弘3年（1333）1月、護良親王は芳野の金峯山城を仮の本拠地として、楠木正成と呼応しつつ同時に挙兵した。鎌倉幕府軍は6万の大軍で押し寄せたため、必死の抵抗も空

しく、護良親王は7本の矢を受け自害しようとした。その時、既に重症を負っていた村上義光（村上彦四郎義光）が護良親王の甲冑を身に付けて身代わりとなり討死した。義光が敵を欺き引き付けているその際に、護良親王は高野山へと落延びていった。

#### 註8：「或投鎌倉窟 憂憤正憤憤」

『足利尊氏護良親王の英邁と威望とを忌み之を陥れんとす、然るに後醍醐帝准皇藤原廉子を寵愛し玉ひ、その言ふ所皆信用し玉ひければ、尊氏之と結託し頻に讒奏して親王を失ひ奉らんと謀る、帝遂に親王を拘へて鎌倉に幽閉し、是を足利氏にわたす、足利は日頃の嫉み深ければ之を土窟に押込め、種々の惨酷を加へ遂に淵辺義博に命じて害し奉りしなり、時に御年二十八才

世の顔運を復し皇風を興し、其社稷に貢献し給ふ所親王多大の功に因る、噫（ああ）枉冤（きょうえん）の獄古今多しと雖も此の如く悲絶惨絶なるものはあらず、實に憤々（うんうん）禁じ得ざる憂憤の状想見するに余りあり』（「詳解」）

「詳解」を長くなりますが、多少分かりやすく解説します。⇒「元弘の乱」は結局失敗に終わり、後醍醐天皇は逮捕・幽閉・廃位され、代わって持明院統の光厳天皇が踐祚した。後醍醐天皇は翌年（元弘2年・正慶元年、1332年）3月に、隠岐島に配流された。この元弘の乱において、足利尊氏は鎌倉幕府の命により出兵、笠置山と赤坂城の攻撃に参加し、勝利に貢献し、その名声を大いに高めた。

翌正慶元年（1333）後醍醐天皇が隠岐島を脱出して船上山（伯耆国）に籠城すると、尊氏は再び幕命を受け、西国の反幕勢力を鎮圧するために上洛した。その途上において幕府に謀反を起こすことを決意し、家人を密かに船上山へ参候させ、後醍醐から討幕の密勅を受けた。

尊氏は上洛後に反幕府の兵を挙げ、諸国の反幕勢力を糾合して、六波羅探題を滅亡させた。関東では、同時期に新田義貞を中心とした叛乱が起こり、鎌倉を制圧して幕府を滅亡に追い込み、ここに北条一門は滅亡した。こうして、足利尊氏は旧幕府に代わって京都の支配権を握ることに成功した。この間、護良親王は幕府の討手を逃れ、芳野、熊野など畿南の地に出没してゲリラ戦を続け、楠木正成は赤坂城陥落後も金剛山の千早城に拠って幕府軍と対峙していた。

6月に後醍醐天皇は京都に戻ることができ、尊氏を鎮守府将軍に任命した。護良親王にも帰京を促したが、尊氏に幕府再興の野望ありと疑う護良親王は、尊氏を牽制するために信貴山に立て籠もったままだった。しかし、征夷大將軍・兵部卿に任じるという天皇の慰撫策に応じて、親王は信貴山を出て上洛した。

天皇親政をめざす後醍醐天皇の建武の新政は理念の通りにはならず、かえって政治的混



乱をもたらし、また尊氏率いる武士勢力の反発を招き、徐々に新政のイニシアティブは尊氏に移っていった。また、護良親王の手勢だった畿内の武士たちは既にその手を離れて尊氏側につき、新政府内での親王の発言権も弱くなっていった。政略が苦手な親王は、失権回復の方途を武力による尊氏打倒に求めるしかなかった。それは尊氏としても察知しており、虎視眈々と親王排除策を練っていた。

後醍醐天皇は艶福家であり、18人の后妃から男女各18人の子女をもうけていた。皇太子に選ばれたのは兄7人をさしおいて、最愛の寵姫廉子の子・恒良親王だった。廉子は後醍醐天皇との間に多くの子女をなして、長子は恒良皇太子、次子は成良（尊氏・直義に擁されて鎌倉に下っている）、三子は義良（護良親王・北畠親房に擁されて陸奥に下っている）で、今後想定される権力争いで覇権を握る可能性のある（括弧書き内の）3つのコースのいずれにも自子を配置していた。廉子は隠岐島に配流された後醍醐天皇に随行したただ一人の妃であり、「太平記」では悪女の扱いだが、実際はこのような気配りが出来る政治的にも実務的にも秀でた女性であったというべきであろう。

しかし、そのいずれかの子を帝にするためには、共通して障害になるのが護良親王だった。護良とライバル関係にある尊氏は、護良親王を失脚させたいという思いで廉子と一致していた。廉子はその寵愛を利用して直接天皇に護良親王を讒言することができたのである。

「帝位篡奪の陰謀・諸国の兵の召集」という尊氏と廉子の讒言を信じた天皇の命を受けた親衛隊武士によって、護良親王は清涼殿の和歌の席において捕縛され、その身柄は尊氏に預けられた。翌月、鎌倉に護送され、鎌倉二階堂の東光寺土牢に幽閉されたが、建武2年（1335）7月、北条時行が鎌倉へ侵攻した際（中先代の乱）、直義の家人・淵辺義博によって殺害された。

## 註9：「或伴櫻井驛 遺訓何殷勤」

『建武中興の業未だ成らずして天下又大に乱れ、足利氏大軍を率いて九州より海陸共に攻め至る。朝廷楠木正成に命じて之を河内に拒かしむ。正成時事の否なるを察し、大勢の如何ともすべからざるを知り、桜井驛にて子正行に遺訓し、必父の志を継ぎて王家に勤勞すべき旨懇々教誡し、訣れて摂津湊川に赴きて戦死せり。其忠誠義烈鬼神を感ぜしめ、芳名遠く千歳の後に輝けり。湊川神社は正成を祀る、明治五年詔して別格官幣社に列せらる。社前に墓碑あり、源烈公表して嗚呼忠臣楠子之墓といふ。』

正行父と桜井驛に訣れし時僅に十一才なりしが、父の戦死をききて自殺せんとし、母に戒められて止む。二十歳の頃には屢尊氏の軍を破り、南朝の勢再び振ふ。是に於て尊氏又大挙して攻め来る。正行四條畷に赴き激戦して之に死す。四條畷神社は正行を祀れるなり』（「詳解」）

「詳解」を長くなりますが、多少分かりやすく解説します。⇒建武2年（1335）7月、

信濃国で北条高時の遺児・北条時行を擁立した北条氏残党の反乱である「中先代の乱」が起きた。時行の軍勢は足利軍を相次いで撃破し、鎌倉を占拠したので、尊氏の弟である足利直義は鎌倉を脱出し、東海道を西走せざるをえなかった。（ちなみに、護良親王が殺害されたのはこの時であり、また、「中先代」は北条氏を先代、足利氏を後代とする立場から、その中間にある北条氏という意味である。）

尊氏は北条時行を討伐のため東下するに当り、後醍醐天皇に征夷大將軍の官職を望んだが許されず、天皇の許可を得ないまま4万の軍勢を率いて鎌倉に向かった。尊氏は直義の軍勢と合流し相模川の戦いで時行を駆逐して、鎌倉を回復した。時行が鎌倉を保ち得たのはわずか20数日にすぎなかった。そのまま鎌倉に本拠を置いた尊氏が独自に恩賞を与えはじめた。後醍醐天皇はこれを尊氏離反の徴候ととらえ上洛を命じたが、尊氏はこれに応じなかった。両者の関係は完全に決裂したと言えよう。

鎌倉攻略の功労者である新田義貞は、その恩賞が尊氏と比べて歴然とした差異があることから尊氏に含むところがあった。そこに目を付けた後醍醐天皇は、護良親王亡き後の尊氏に対する新たな対抗馬として新田義貞を考えるようになった。こうしたムードを察してだろうか、尊氏は新田義貞を君側の奸であるとして天皇にその討伐を要請した。しかし、天皇は逆に義貞に尊良親王をとまわせて尊氏討伐を命じた。

矢作川（三河）の戦い、手越河原（駿河）の戦いで官軍である新田軍が連勝したが、尊氏は新田軍を箱根・竹ノ下の戦いで破り、逆に京都へ進軍を始めた。建武3年（1336）正月、尊氏は破竹の勢いで京都まで攻め上がり、入京を果たした。京都の覇権を巡り尊氏と後醍醐帝配下の諸将の間で激戦が始まり、淀川近辺で両軍は激突する（淀大渡の戦い）。この戦いは義貞らの敗北に終わり、後醍醐帝は比叡山に退き、京都は足利尊氏の軍勢に占領されることとなった。

しかしほどなくして北畠顕家が奥州から上洛したことによりこの形勢は逆転し、足利勢は楠木正成・新田義貞との連合軍からの攻勢に晒されることになった。尊氏は京都を追われ、後醍醐帝が京都を奪還する。敗走する足利軍は、摂津国豊島河原の戦いで新田軍に大敗を喫したため、ついに九州へと落ち延びていった。

九州へ西下した尊氏は、中国・九州など西国の武士を急速に傘下に集めて勢いを取り戻し、再び東上した。進撃を続ける尊氏を迎撃するため、新田義貞は楠木正成と共に迎撃することとなり、5月25日の湊川の戦いとなった。ここで尊氏は、新田義貞・楠木正成の軍を破り、6月には京都を再び制圧した（延元の乱）。後醍醐帝はまた比叡山に退いた。

正成は義貞の器量を疑い、今の状況で尊氏方の軍勢を迎撃することは困難なので、尊氏と和睦するか、又はいったん都を捨てて比叡山に上り、空になった都に足利軍を誘い込んだ後、これを兵糧攻めにすべきだと後醍醐帝に進言したが、いずれも聞き入れられなかった。

そこで正成は死を覚悟して湊川の戦場に赴き、その途中、西国街道の桜井駅にさしかかった頃、数え十一歳の嫡子・正行（まさつら）を呼び寄せた。「最期まで父上と共に」と懇願する正行に対し、「生き残って、いつの日か朝敵を滅せ」と諭し、後醍醐天皇から下賜された菊水の紋が入った短刀を授けて今生の別れを告げ、故郷の河内へ帰した。

湊川の戦いで敗れた父の首級を受け取った正行は、覚悟していたとはいえあまりの衝撃に耐えかね、父の形見の菊水の短刀で自刃しようとしたが、生母に諭され改心したという。亡父の遺志を継いで、正行は楠木家の棟梁となって南朝方として戦った。1348年の四條畷の戦いで足利尊氏の腹心・高師直と戦ったが、楠木軍は足利方の圧倒的な兵力の前に敗れ、正行は弟の正時と刺し違えて自決したとされている。

この故事を謳った『桜井の訣別』（作詞：落合直文、作曲：奥山朝恭。）が、明治32年（1899年）に発表された。（上記の様子を見事に謳い込んでいるので、参考までに掲げておきます。）

一

青葉茂れる桜井の 里のわたりの夕まぐれ 木(こ)の下陰(したかげ)に駒とめて 世の行く末をつくづくと 忍ぶ鎧の袖の上(え)に 散るは涙かはた露か

二

正成涙を打ち払い 我子(わがこ)正行呼び寄せて 父は兵庫へ赴かん 彼方(かなた)の浦にて討死(うちじに)せん 汝(いまし)はここまで来(きつ)れども とくどく帰れ故郷へ

三

父上いかにのたもうも 見捨てまつりてわれ一人 いかで帰らん帰られん この正行は年こそは 未だ若けれ諸共(もろとも)に 御供(おんとも)仕えん死出の旅

四

汝をここより帰さんは わが私(わたくし)の為ならず 己れ討死(うちじに)為さんには 世は尊氏の儘(まま)ならん 早く生い立ち大君(おおきみ)に 仕えまつれよ国の為め

五

この一刀(ひとふり)は往(いに)し年 君の賜いし物なるぞ この世の別れの形見にと 汝にこれを贈りてん 行けよ正行故郷へ 老いたる母の待ちまさん

六

共に見送り見返りて 別れを惜む折りからに 復(また)も降り来る五月雨(さみだれ)の空に聞こゆる時鳥(ほととぎす) 誰れか哀(あわれ)と聞かざらん あわれ血に泣くその声を

## 註10：「或殉天目山 幽囚不忘君」

『武田勝頼織田氏の為に攻められ天目山に遁れ入りしが、主従総勢僅に四十人のみ、君臣共に死を旦夕に待つのみ、此時小宮山内膳と云ふ者、曩に勝頼の勘気を蒙り幽閉せられしが、国の難君の急を視るに忍びず、梗概死を決して主君の難に殉げんと土屋宗藏に由りて勘気を許されんことを請ふ、内膳實に正義の士なれども、佞臣の嫉む所となり、勝頼讒を信じて遂に之を押し込めしなり、此時に至て勝頼始て涙を流して深く其志に愧づる所あり、内膳遂に忠勇の戦死を遂げたり』（「詳解」）

「詳解」を多少分かりやすく解説します⇒天正3年（1575）5月の長篠の戦い以後勢力が衰えた武田勝頼に対して、織田信長は天正10年（1582）3月に甲州への侵攻を開始した。戦況不利とみた武田氏親類衆の穴山梅雪・木曾義昌が寝返り、武田信廉は一戦も弓を交えず早々と逃亡する状況の中、勝頼は完全に進退窮まってしまった。

勝頼主従は、居城を棄て転々と移動した末、やむなく武田家祖先の墓がある天目山棲雲寺を目指したが、これを知った天目山の地下人たちや、変心した武将は手を携えて、勝頼主従に鉄炮を撃ちかけ、入山を拒んだ。かくて勝頼主従は引き返さざるを得ず、田野という所で立ち往生してしまった。

さて、この段の主人公・小宮山友晴は、松井田城代・小宮山昌友の子である。父・小宮山昌友は、武田信玄の家臣・侍大将として、信濃の諏訪城代、上野の松井田城代を務めたが、1572年10月の遠江二俣城攻めで戦死。その為、小宮山家の家督は長男だった小宮山友晴が継いで小宮山内膳友晴となり、侍大将となった。

内膳は父に劣らぬ武将であり、使番十二人衆のひとりでもあったが、上役に対してでもズバズバと思った事を言う性格が災いして、武田勝頼の側近である跡部勝資、長坂光堅、秋山撰津守、小山田彦三郎らと仲が悪く、また、長篠の戦いで敵前逃亡した武田信廉など武田一族衆に対しても厳しい態度で臨んでいた。その為、長坂光堅の讒言もあり、主君・武田勝頼から蟄居を命じられてしまった。

織田軍が武田勝頼を包囲する中、蟄居中の内膳は、「譜代の臣でありながら、武田家最後の戦いに臨めぬは末代までの恥辱」であり、「御盾となり高思の万分の一にも報いたい」と、自身の忠節を貫く為に勝頼最後の地・天目山に駆け付けた。なんとか天目山で武田勝頼一行を見つけ出し、土屋昌恒と秋山光綱にお供を願い出た。

既に武田恩顧の重臣らが逃亡した中、土屋惣藏と秋山光綱は、この内膳の勇氣ある行動と忠義に免じて、すぐさま武田勝頼に進言した。勝頼は「あっぱれな武士の鑑よな、余の不徳の致す処であった」と直ちにこれを許し、閉門を解いたのである。

そのあと、内膳が土屋惣藏にむかって長坂光堅はどうしたかと尋ねると、昨日逃げ出したと答える。跡部大炊助はと問えば、これも逃げ出したと答える。秋山撰津守はと問えば、十

日も前に逃げ出したという。(蟄居のもととなった)我が敵、小山田彦三郎はと問えば、これも十日前に逃げ出したという。

内膳はそれを聞き、涙を流して、「さてもさても、勝頼公は運も末となられたことよ。お目がね違いのため、引き立てお取り立てになった者すべてが逃げてしまうとは」と嘆いた、と「甲陽軍艦」にある。

3月11日、山霧の中、武田勝頼は鳥居畑に陣を張った。内膳はその下流部分の四郎作に陣を構えた。四郎作の戦いで小宮山勢は僅か数人で、織田勢は滝川一益、河尻秀隆ら約4000。小宮山内膳は十数本の矢を受けて討死した。

鳥居畑の本陣にも織田勢が攻撃開始。武田勝頼、武田信勝、金丸定光、土屋昌恒らは戦うが、武田勝頼は鉄砲で打たれ、動けなくなり土屋昌恒に介錯され自刃した(享年16)。

### 註11：「或守伏見城 一身當萬軍」

『秀吉薨ずるに臨み、遺命して大老奉行等をして秀頼を輔けしむ、薨じて後前田利家は大阪に徳川家康は伏見に在り、既にして利家薨じて家康の勢日に盛んなり、石田三成その豊臣氏に不利なるを見て家康を除かんと図る、毛利輝元、上杉景勝、浮田秀家等之に興し、加藤清正、福島正則、細川忠興等は家康に党せり、既にして景勝会津に帰りて後頼りに城塞を修め、軍備の様子ありければ、家康之に西上を促せども応ぜず、却て家康が秀吉の遺命に背きたるを誚(せ)めしかば、家康大に怒りて其臣鳥居元忠を伏見に留めて、自ら其子秀忠と大兵を率いて向ふ、元忠決死大軍を引受け、孤城を守りしが遂に力盡きて戦死す』(「詳解」)

「詳解」を長くなりますが、多少分かりやすく解説します⇒天下人・豊臣秀吉の心を占め悩ませていたのは、自分亡き後の幼い秀頼の将来であった。慶長3年(1598)5月に秀吉は病の床につき、8月には死を覚悟し、徳川家康、前田利家、毛利輝元、宇喜多秀家、上杉景勝の5人に、秀頼をよろしく頼むという遺書を遺して亡くなった。

秀吉の死後は、この5人の大老の合議によって政治が運営され、また、前田玄以、浅野長政、増田長盛、石田三成、長束正家の5人が奉行として実務を執行した。

秀頼は大阪城に入り、前田利家が守り役としてこれに従い、徳川家康は伏見の自邸で政務をみていた。時とともに、家康の実力が群を抜いて大きくなり、これに対抗できるのは年功から言っても前田利家だけとなったが、利家を支えていたのは石田三成であった。

その前田利家が死去した。家康に対抗できる実力者がいなくなり、大老・奉行間の権力バランスが崩れた。また、以前から武功派(加藤清正、福島正則、黒田長政、浅野幸長、細川忠興、池田輝政、加藤嘉明)と文吏派(石田三成、増田長盛、長束正家、小西行長)とはソリが合わなかった。利家の死去により武功派にとっての重しが無くなってしまった。早速、武功派は三成を殺そうとしたが、いち早くこれを察知した三成は、あろうことか家康に保護を求めた。家康は三成をかくまい、居城の近江佐和山に送りどけてやった。三成の失脚で

ある。

毛利、前田、宇喜多、上杉の4大老は、それぞれ領国内に問題を抱え、中央の政局に気を配る余裕がなく、帰国してしまったし、武功派の加藤清正なども朝鮮出兵で疲弊した領国の経営再建のため帰国した。そしてまた、三成が去り、文吏派もその核を失った。4大老をはじめ有力大名が京、大坂にいなくなり、政治的勢力の空白が生じた。家康は、朝鮮出兵を免れて関東の領国経営を成功させて実力を蓄えてあったので、一人中央政界に残り、とうとう天下の政治を仕切る立場に立ったのである。

すると家康は、有力大名に謀反・陰謀の疑いをかけ、中央政府の名において出兵すると脅すことにより、個別に屈服させるという手を用い始めた。細川忠興、前田利家がこの手でやられ、人質を取られ家康に逆らえなくなった。次に狙われたのは、領内の城郭を修理し、兵糧・武器を蓄えるなど軍備を強化していた上杉景勝だった。景勝が上洛の求めを拒否すると、景勝に謀反の濡れ衣を着せ、家康は諸国の大名に中央政府軍の統率者の名において出兵を指令した。家康自らも大阪を発し、会津へ向かった。

近江沢山において虎視眈々と機を窺っていた石田三成が、これを待っていたかのように動き出した。家康の専横を弾劾し、故太閤の恩顧の想起と秀頼への忠節を旗印として、諸大名に自陣への参加を呼び掛けた。大阪には毛利輝元、宇喜多秀家をはじめ、主として近畿、中国、四国、九州の諸大名が集まり、「西軍」を構成した。秀吉恩顧の加藤清正、福島正則、細川忠興等武功派の大名は家康の「東軍」に与した。

西軍はまず伏見城に押し寄せ、城明け渡しを要求した。家康が留守となった居城の伏見城を任されたのが鳥居元忠だった。城を守る兵はわずかに1800人。三成が拳兵し、そして伏見城が前哨戦の舞台になることは、家康の読み筋であった。その守備を命じるのは「死ね」と同義である。かけがえのない忠臣を死に追いやるのは、家康としても断腸の思いだったのであろう。会津出陣の途次、家康は伏見城に宿泊し、元忠と深夜まで酒を酌み交わしたといわれる。家康が「置いていけるのは3000ばかりで、苦勞をかける」と言うと、元忠は「なんの、殿の天下取りのためならば、この彦右は喜んで捨石となりましょう。捨石に3000の兵は多すぎますぞ。これから殿はまだ兵が必要になり申す」と1800人に減らさせたと伝えられる。

伏見城に残った家臣や兵たちも、元忠に応じて奮戦をし、なんと13日間も持ちこたえたが、やはり多勢に無勢。徐々に押され、元忠は鈴木重朝（雑賀孫市）と一騎討ちを演じて討死にしたと言われている。

主君・徳川家康の天下を夢見て、長年共に戦った鳥居元忠は、最後に命を張ってこれ以上ない忠義を示し、まさに「三河武士の鏡」であったと称えられる。戦後、家康は元忠の功に報いるべく、元忠嫡男の忠政に6万石を加増した。最終的には山形24万石の大名となり、

江戸時代を通じて家名が存続した。

### 註12：「承平二百歳 氣常獲伸」 「然當其鬱屈 生四十七人」

『徳川幕府創立以来太平打続き、元禄の世奢侈風をなして士氣全く衰えしが、茲に大に士人の墮夢を覚破せしものあり、これ赤穂義士復仇のことにして、正氣も時に鬱屈せるときに当りては、忠勇義烈凜々たる四十七士を出すなり。

元禄十五年十二月十四日雪夜に乗じて義央の邸を襲い、之を殺してその首を長矩の墓前に供し、自首してその罪を乞へり、幕府良雄以下に死を賜ひ、吉良氏の領地を奪へり。後世良雄等の忠義を称して義士と呼び、今なお高輪泉岳寺の墓頭香花常に絶えず。』〔詳解〕

(忠臣蔵でお馴染みの事件であり、「詳解」の文を載せるにとどめます。)

### 註13：「日本書紀」

上記註3にある事件(乙巳の変)についての「日本書紀」における記事を記載しておきます。「卷第24 天豊財重日足姫天皇 皇極天皇」にある文章を抜き書きしています。

中臣鎌子連為人忠正有匡濟心 乃憤蘇我入鹿失君臣長幼之序 挾覬覦社稷之權 歷試接於王宗之中 而求可立功名哲主 便附心於中大兄 疏然未獲展其幽抱

偶預中大兄於法興寺槻樹之下打毬之侶 而候皮鞋隨毬脫落 取置掌中 前跪恭奉 中大兄對跪敬執 自茲相善俱述所懷 既無所匿

(途中略)

六月丁酉朔甲辰 中大兄密謂倉山田麻呂臣曰 三韓進調之日 必將使卿誦唱其表 遂陳欲斬入鹿之謀 麻呂臣奉許焉

戊申、天皇御大極殿。古人大兄侍焉 中臣鎌子連知蘇我入鹿臣為人多疑 晝夜持劍 而教俳優 方便令解 入鹿臣咲而解劍 入侍于座 倉山田麻呂臣進而誦唱三韓表文

於是中大兄戒衛門府 一時俱鑰十二通門 勿使往來。聚衛門府於一所 將給祿。時中大兄即自執長槍、隱於殿側。中臣鎌子連等持弓矢而為助衛。使海犬養連勝麻呂授箱中兩劍於佐伯連子麻呂与葛城稚犬養連網田曰 努力努力 急須忖斬 子麻呂等以水送飯 恐而反吐。中臣鎌子連嘖而使勵。

倉山田麻呂臣恐唱表文將尽 而子麻呂等不來 流汗妖身 乱声動手 鞍作臣怪而問曰 何故掉戰。山田麻呂對曰 恐近天皇不覺流汗。

中大兄見子麻呂等畏入鹿威、便旋不進曰、咄嗟、即共子麻呂等、出其不意、以劍傷割入鹿頭肩。入鹿驚起。子麻呂運手揮劍、傷其一脚。入鹿轉就御座、叩頭曰、当居嗣位、天之子也、臣不知罪。乞垂審察。天皇大驚、詔中大兄曰、不知所作、有何事耶。中大兄伏地奏曰 鞍作尽滅天宗、將傾日位。豈以天孫代鞍作乎。蘇我入鹿更名鞍作 天皇即起人於殿中。佐伯連子麻呂・稚犬養連網田、斬入鹿臣。是日雨下潦水溢庭。以席・障子覆鞍作屍。

以上、註書きについては、主に「日本の歴史」（中公文庫）、「天皇の歴史」（講談社学術文庫）、「日本書紀」（日本古典文学全集・小学館）、「太平記」（日本古典文学全集・小学館）、「ウィキペディア」を参考としました。